

鳴門でよみがえった幻のヒマワリ ～唯一無二の美術館をめざして～

大塚国際美術館
常務理事



田中秋彦

大塚オーミ陶業株式会社
特別顧問



的場幸雄

徳島経済研究所
専務理事



海出隆夫

大塚国際美術館の現在

海出：2021年9月で、大塚グループの創立100周年とのことで誠におめでとうございます。

大塚国際美術館は、グループの75周年事業として1998年3月に開業されましたが、その後24年経過し、これまでの累計入館者はどのくらいでしょうか。

田中：2019年には500万人を突破しました。

海出：この2年間はコロナ禍の影響で、社会活動全般が大きな制約を受けましたが、当美術館はどういう状態でしたか。

田中：2020年3月4日から6月18日までの107日間、初めて連続休館という形を取らざるを得なくなりました。

海出：コロナ感染が落ち着きを見せている中（2021年12月現在）、今日はたくさん学生も来



左から、的場特別顧問、田中常務理事、海出

られています、今の状況はいかがですか。また感染予防策はどのようになっていますか。

田中：本日も修学旅行の学生が何組か来られています、最近になって来館者数が以前の2分の1くらいまで戻っています。

浅井学芸部長：対策については休館中にいろいろと考えました。できるだけお客様のご負担にならないよう、館内では心おきなく過ごしていただくことを心がけました。掲示物、放送もコロナや感染症といった具体的な言葉をできるかぎり使わず、入館時の体温測定も、直接はわからないように工夫しました。3か所あるカフェも1か所に限定し、マスクを外しても安全に食事ができるように卓上にパーテーションを入れています。スタッフの手洗いはもちろん、下膳の後の食べ物の処理など衛生的なことも徹底しました。おかげさまで今まで館内で感染された方はいません。

海出：これだけ大きな施設ですから、そういった対策をされるのも大変ですね。

浅井：逆に大きいことがありがたいこともあります。現在5,250人の方に同時に美術館に滞在していただくことができますが、お客様に安心していただくために、あえて具体的な数字を出しています。1人に2m四方の空間を取ったとして、展示室と通路を合わせた面積で計算すると5,250人です。

田中：常時5,250人が館内に滞在することはまずないですが、入館者数・退館者数を常に確認して今館内にいる人数を把握しています。

浅井：広いからこそ安心してもらえるんですね。

海出：なるほど、館内でソーシャルディスタンスが取れるということですね。

+

×

+

×

鳴門の地に陶板名画美術館をつくる

海出：それでは美術館の歴史についておしえてください。

田中：元々は、大塚グループ創業者の大塚武

^{さぶろう}三郎氏と2代目の大塚^{まさひと}正士氏が、創立50周年に何かしようと考えていたところ、大塚武三郎氏が病の床に伏したため記念事業ができませんでした。それで正士氏が75周年には必ず何かしようということで、記念事業として美術館建設と大阪本部のビル建設が考えられていました。ビルは設計までできていましたが、バブル崩壊もあり、建設は延期されました。しかし、鳴門の美術館事業は絶対やると。

海出：普通なら順番を逆にするのが当たり前ではと思いますが。

田中：そうですね。しかし、徳島に対する長年の恩返しという気持ちが強かったんだろうと思います。地元愛ですね。

海出：そういう熱い心があったわけですね。そもそも美術館を作ろうという発想はどこからきたものでしょうか。

田中：絵画陶板を作る技術を持っていましたから、展示場を兼ねて作りたいと思ったのではないのでしょうか。

的場：鳴門といえば何といっても渦潮なんですよ。渦潮は一日のうち見ごろの時間帯があるので、その待ち時間に美術館を見てもらおうと。

田中：ですから、地上階には「鳴門公園・四国のみち」につながる出入口を作っています。

海出：なるほど。両方楽しんでくださいということですね。当時田中さんは、会社ではどういったポジションで関わられたんですか。

田中：構想段階に入った1990年頃は(株)大塚製



初代館長 故大塚正士氏

薬工場の総務部におりました。

海出：まさにこのプロジェクトの中核部署ですね。

田中：建設にあたって環境庁(現在の環境省)と文化庁の許認可をもらう担当です。当初の見込みより年数もかかり苦労もしました。

海出：的場さんはその当時どういったお仕事を。

的場：大塚オーミ陶業(株)信楽工場の工場長でした。1978年に開設した大塚潮騒荘(大塚グループの福利厚生施設)の各階に「障壁画」もしくは「襖絵」の美術陶板を施工、3年後、初めて西洋名画の陶板を制作し1階ロビーに展示していただきました。

海出：それが陶板絵画のスタートだったんですね。

的場：最初は十数点作りましたが、当時は技術的なレベルも十分ではなく、ご覧になった絵画選定委員の先生方は「これではちょっと無理だ」と思われたそうです。信楽工場が1980年に今の工場になり、写真製版、印刷の設備ができたんです。それからいろいろノウハウができて、技術的な精度も向上していきました。

海出：美術館プロジェクトでは最初に美術財団(一般財団法人大塚美術財団)を作りましたね。

田中：美術館ができる5年前ですね。いろんな美術館から著作権や版權といった権利をいただくために財団というのが非常に重要なんです。特に海外では。

海出：法律的に、財団でないといけないということですか。

田中：そうではないんですが、海外では財団である方が受け入れられやすいんです。

的場：作品を作るために許可が必要ですが、フランスはフランス美術連盟の写真部というのがあり、そこは口頭の依頼でポジフィルムを貸していただきました。ところが、イギリスやアメリカは口頭では無理なので、美術財団を設立した上で定款や具体的な建設計画をきちんと見せて、それで初めて許可をいただきました。

田中：欧米は公益や社会貢献という意識が強いんでしょうね。

海出：陶板だけの美術館を作るということは今まで誰も考えたことはなかったと思いますが、どこからこの発想が出てきたんでしょうか。

田中：これは大塚正士氏本人に聞かないとわからないですね(笑)。

海出：建材のタイルから始まり、それが肖像陶板という形になり、さらにステップアップして陶板名画になっていったということでしょうか。

的場：大塚グループで作った製品は、使えなくなってしまうものがほとんどなので、何か形に残るものを作りたかったという思いもあったようです。それから「教育」とよく言っていましたね。

田中：財団設立の趣旨の中に、徳島県の青少年や美術を愛好する方々にこの陶板美術館を見て勉強していただいた上で、機会があれば海外へ行って原画を見てもらいたいということが書かれています。

的場：地元にも恩返しをするために、明石海峡大橋開通時までに「鳴門に、原寸大の陶板名画で、千点以上展示する美術館をつくる」というのが絶対条件でした。

田中：明石海峡大橋が開通すると経済が活性化されると県民はとても期待していました。しかし、その時すでに大塚正士氏は先を読んでいた。「そうじゃない、橋が開通すれば逆に持っていかれるんだ」と。なおかつ、「橋が架かると鳴門は素通りになるから、ここに人を堰き止めるダムとして作るんだ」ということも盛んに言っていました。

海出：そのために必要な施設でもあったわけですね。原寸大というこだわりは、やはり原画に限りなく近いものということですね。

的場：そうです。最初の3年くらいは、絵画選定委員の先生方も、そんなものができるのかといった感じでした。

田中：許認可をもらう担当のわれわれも半信半





大塚国際美術館 常務理事 田中秋彦氏

疑でしたから。

+

×

+

×

トライアンドエラーで培った技術

海出：技術的なことでは、焼き物の絵付けの技術と、印刷技術を融合させてということで、大変なご苦労があったと思いますが。

的場：焼き物では現在の網点あみでんの印刷ではなく、各色を製版・印刷する分色の方法が一般的でしたが、1975年頃に、名古屋の印刷会社と協力して、従来の印刷物と同じように黄・赤・藍・墨で表現する技術ができました。ただ、ものが大きいですから紙も当然伸びたり縮んだりして、ピントが合わないとか。一枚で印刷できる大き

さが決まっていて、60cm×80cmくらいなんです。それをつなぎ合わせて仕上げるのがなかなか難しい。転写紙を2枚、3枚重ねていくのがなかなか合わない。隣の色と全然違っていたり。手で修正しきれないくらい合わない。それから、焼き物でどうしても出せない蛍光色のような色があり、その辺がなかなか難しいところでした。

たとえば、スクロヴェーニ礼拝堂のブルーの色は特徴的で、あの光沢の無い青色をどうして出すか。色、形、質感、それをどう表現するかですね。

海出：当時はノウハウが無い状態から始めたんですよ。

的場：そうですね。それに、当時は写真の原板がアナログなので、すべてポジフィルムから拡大して制作しました。今はデジタルなのでもっと精度の高いものを作れます。

海出：色は最初から狙った色を焼き上げることができるんですか。

的場：ええ、7～8割は見当がつかます。ただ、焼いてみないとわからないものもあります。ですから、当美術館の場合は最終的に手で加筆をしています。印刷だけで終わっている作品は少ないです。



スクロヴェーニ礼拝堂

海出：非常に高度な技術が凝縮されているわけですね。

的場：繰り返しやっていくことによって、ノウハウが培われ技術的にも上がっていきます。

海出：また絵画のキャンバスとなる、ゆがみのない真っ平らな長さ3mの陶板を焼く技術もかなり難しいものがあるんでしょうね。

的場：少し難しい話になりますが、焼き物には土の部分と上薬の部分があり、膨張係数が上手く合わない^さと反りが出ます。それから、冷め割れ^さといって冷却の時に割れることがあります。真っ直ぐに焼くことがなかなか難しく、トライアンドエラーで一番良い条件を見つけて基本を作ります。

海出：かなりトライアンドエラーを繰り返されたんですね。

的場：1975年の初期の頃は、通常のアートの陶板だと10本あれば1本は割れたりすることがよくありました。そうするとまた色が合わなくなります。

海出：その場合は、割れたところだけのやり直しですか。

的場：作品によっては割れた部分だけでいい場合もありますが、全面作り直しの場合もよくあります。

海出：そしてその後、三次曲面が登場して、〈システイーナ・ホール〉や〈スクロヴェーニ礼拝堂〉の壁・天井で使用されていますが、これも大変な技術なんでしょうね。

的場：そうです。大きな板で初めて曲げたのが〈スクロヴェーニ礼拝堂〉です。くわしいデー

タが残っていなかったので、実際にすべて測量しました。それから、〈モネの大睡蓮〉も若干曲がっています。〈システイーナ・ホール〉では、開館10周年事業としておこなったミケランジェロの天井画完全再現の際に追加した天井画の四隅、スパンドレルという帆のような形になっているところですよ。幸いシステイーナ礼拝堂の場合は古い図面がヴァティカンに残っており、数字的にわかっていました。それをいかにうまく曲げるかと悩みに悩んで、最終的に小さい模型を作り、こういうふうにするばうまく収まるのではないかなというところまでできたんです。カップドキア(聖テオドル聖堂)も図面がありました。

田中：三次曲面のスパンドレルを再現するのに、的場さんがずっとヴァティカンのシステイーナ礼拝堂の中でたたずんで、考え込んで、やっと思いついたんですよ。

的場：最終的にはスパンドレルの下地のFRPを作るのに原寸の木枠を作ったんですよ。いろいろ考えていたら、すっと浮かんできました。これをうまく利用すればできると思って。

田中：それを思いついたのはすごいですね。

的場：ちょっとした偶然というか、失敗から学ぶということですね。

+

美術館建設へ

海出：そしていよいよこの大きな建物の建設に着手するわけですが、国立公園の中に作るということで、想像を超えるような制約や困難があったと思いますが。

田中：大塚正士氏は、鳴門の渦潮の



大塚国際美術館 航空写真



大塚国際美術館 正面玄関

きらめて地下に隠すことにしました。それから地上部分の建物にも制約があり、地下は1棟ですが、地上は3棟に分かれています。

あとは、環境アセスメントを1年間要求されました。現地の植生を崩さないように、一部は仮植して埋め戻し、なおかつ開発面積は極力

近くでなければという考えを最初から持っていました。当時の徳島県知事に相談した時に「国立公園内は難しいから他の場所で」と言われましたが、全く聞く耳を持たない状況でした。渦潮の隣でなければだめだと。鳴門の渦潮というたくさんの人が集まる名勝の近くに建ててこそ、多くの方に来館していただけるという思いがあり、この場所にこだわったんだと思います。

海出：ここは譲れないこだわりだったんですね。

田中：ところが、現地は国立公園の2種地域で、簡単に許可が下りるような場所ではなかったんです。ただ、ホテルや東屋などは建設できて高さも融通が利きますが、美術館はだめだと。

それでも挑戦するんだと、あの手この手で取り組みましたが、なかなか前に進まない。最後は徳島県、鳴門市、大塚グループの三者でチームを組んで、足繁く環境庁へ通った結果、開発許可がいただけました。執念ですね。

地上に見える部分も高さ13mまでという制限がありました。正士氏は最初、この山の上に西洋のお城のようなものを作りたかったが、あ

少なくすることにも気をつかいました。本来山を削る時は斜めに削りますが、できるかぎり垂直に削るということで、建設会社も苦労しました。鳴門の山は5mくらい掘ると砂岩なので、切り開くとすぐ崩れるため、土木工事に相当な費用がかかりました。

海出：そういう状況では、誰しも無理だと思いますね。

田中：ここでないとだめだと、てこでも動かないという信念ですね。そういう信念の陰で、県や関係者の方にはずいぶんど苦労をおかけしました。

環境庁の方は、県がうまく人脈をつなげてく



大塚オーミ陶業株式会社 特別顧問 的場幸雄氏

れて比較的順調でしたが、文化庁はなかなか大変でした。県の教育委員会の皆さんが応援してくれました。

海出：県も当美術館を何が何でも作ると考えていてくれたということですか。

田中：そうです。あの場所以外には作らないと知事もわかっていましたから。

海出：無理だろうなと思いながらでは、とても実現できなかったでしょうね。そして総事業費がものすごい金額になりましたね。

田中：建設費、陶板制作費などすべて含めた総事業費は約400億円になりました。

海出：400億円というのはすごい金額ですね。

田中：現在、鳴門市の津波の際の避難場所に指定されています。延べ床面積が約9千坪(約29,000㎡)あり、万一災害が発生したときは、入館者はもちろんのこと周辺地域の方々を守ることができます。

＋ × ＋ ×

使用許可～名画再現

海出：次は、美術館の命ともいべき展示物、絵画の話ですが、最初から千点以上ということでしたが。

的場：とにかく千点以上展示するということで、専門家の先生方が美術史的に有名な作品を選定していきました。選定しながら許可を取りながら制作しながらでしたね。田中さんは建物の許可の担当でしたが、われわれは作品の許可で、著作権者、撮影したカメラマン、所有者の三者に必ず許可を取るという形で書類を作成しました。陶板を作るのも大変でしたが、許可をもらうのはもっと大変でしたね。

海出：使用許可でご苦労されたお話をお聞かせください。

的場：国の一括許可だったり、個々の美術館ごとの許可だったりケースバイケースなんです。イタリアは、国立の美術館や博物館にある作品は国の一元管理でした。トルコ、ギリシャも全部国でした。フランスは、RMN(フラン

ス国立美術館連合)の権限でした。フランス、イタリアは案外早く許可が取れましたが、ゲルマン系はなかなか難しかったですね。

海出：なぜそういった違いがあるんでしょうか。

的場：フランスなどでは文化財は世界人類のためのものだという考え方があり、そのへんの考え方の違いでしょうね。

海出：書類は当然現地の言葉ですね。

的場：そうです。日本語に訳すとニュアンスが違ってくるので、その国の法律に長けた弁護士の先生方に手分けして確認していただきました。最終的には、統括で1人、全部で6人でした。

田中さんの方はなかなか土地が決まらない。われわれは作品の許可がなかなか取れない。正士社主からはまだかまだかと(笑)。

田中：それで正士氏は自ら環境庁に行きました。

海出：何が何でも作りたいという思いですね。

田中：鳴門の工場にどんどん作品が入ってきて、本来薬品を入れる倉庫の数か所が陶板と額縁で占領された状態でした。大丈夫だろうか、本当にできるんだろうかとみんな思っていました。

海出：資料によると、ピカソの、特に〈ゲルニカ〉の許可を得るのに大変ご苦労されたと。

的場：社主から「ピカソの絵がないのは相撲の番付で横綱がないようなものだ」と言われていたので、ピカソのご子息であるクロード氏に許可をもらいに行く時は土下座する覚悟でした。1996年の12月に「パリ市立プティ・パレ美術館でピカソ展をやっているから、その中の〈窓辺に座る女〉を試作して、それがよければ許可を与えよう」ということになり、急いで現地へ行きました。翌年の3月に試作品を持っていきOKが出て、その結果15点もの許可をもらうことができました。

田中：その後、クロード氏が2度来日し、一緒に鳴門の寿司屋へ行ったのは良い思い出です。





聖シルベストロ騎士団長勲章を授与される2代目館長故大塚明彦氏

海出：最初反対だったのは、絵画を陶板に複製するからですか。

的場：陶板がどういうものかわからないからです。

陶器の壺などはよくありますが、平面に絵をつけたというのがなかなか無かったので、最初は小さい作品を作って見てもらって許可をしていただきました。フランスでは最初にコロ作〈ナルニの橋〉を、スペインではゴヤ作〈ボルドーのミルク売りの娘〉を試作しました。

海出：さて、当館の一番の特徴が、展示作品が陶板でできているという点で、原画ではなくレプリカだということですが、そのことを否定的に見る方が必ずいらっしゃると思うんです。しかし、ここがレプリカ美術館だからこそできること、ぜひとも来館者の方に味わってほしいことを聞かせてください。



ヴァチカン美術館フランチェスコ・ブラネリ館長来館

田中：おっしゃるとおり、偽物だと揶揄されたこともあります。この美術館ならではのいろんな見せ方があります。たとえば、〈システリーナ・ホール〉や〈スクロヴェーニ礼拝堂〉などの環境展示は現地から持ってくることはできませんから、それを礼拝堂ごと原寸大で見られることの意義は非常に大きいですね。

海出：なるほど確かにその通りですね。

田中：それから同じような作品を対比したり、並べて展示したりすることが可能です。例えば〈最後の晚餐〉は1979年から20年かけて現地で修復されましたが、この大規模修復で新たに発見されたことも多数ありました。当美術館では修復前のものと修復後のもの両方が対面で展示されており大変好評を得ていますが、これは開館5周年の記念事業の目玉として製作したもので、2代目館長・大塚明彦氏の強いリーダーシップで実現したものです。また開館当初は中央の「創世記」部分しかなかった〈システリーナ・ホール〉の天井画を、2007年3月、10周年記念事業として完全再現しました。この機会には、当時のヴァチカン美術館のブラネリ館長にお越しいただいたのですが、遠く離れた日本の地に原寸大のミケランジェロの天井画と壁画が再現されたことに大変感激され、「ここは、現地ヴァチカンのシステリーナ礼拝堂と共鳴し合う“ナルトシステリーナ”です。」とおっしゃいました。大塚明彦は、この功績をたたえられ、

ローマ教皇より「聖シルベストロ教皇騎士団勲章」を授与されました。

さらに、陶板作品を通じて失われた名画を再現し、皆さんに見ていただくこともできます。ゴッホの幻の〈ヒマワリ〉などがまさにそうですね。日本の兵庫県芦屋市にあった作品で、1945年8月終戦前の空襲で焼失したんです。また、2018年には、ゴッホの〈タラスコンへの道を行く画家〉も再現しました。これらは陶板名画の強みです。

浅井：これは、ゴッホ唯一の全身自画像



3代目(現)館長 大塚一郎氏

ですが、第二次世界大戦の際にドイツで消失してしまいました。7つの〈ヒマワリ〉を再現した際に、イギリス人のゴッホ研究家から、「これは絶対に追加した方がいい」と提案がありました。消失前に所蔵していたドイツ、マグデブルク文化歴史博物館を紹介してもらい、1930年のネガフィルムをいただいて再現しました。再現した絵は、現地の美術館に1枚、当館に1枚、同じ陶板の絵を持ち合って飾るということで、現地でも報道していただき話題になりました。

海出：元になっているのは、昔の写真ですか。

浅井：消失する前の1930年の写真があり、しかも、当時としてはめずらしくカラーでした。

海出：それが今の時代まで残っていたわけです



タラスコンへの道を行く画家

か。

浅井：そうなんです。ドイツのとても有名な写真会社が撮ったものが残っていて、それをデジタルにした状態で保存していました。額縁は白黒の写真しかなかったんですが、おそらく金で作ったものだろうと再現して一緒に持っていました。

田中：先方の美術館は75年ぶりに戻ってきたと大変喜んでくれました。

+

×

+

×

幻の〈ヒマワリ〉を復元

海出：復活された幻の〈ヒマワリ〉(2014年10月1日より追加展示)のこともぜひお聞きしたいんですが。

浅井：現在の大塚一郎館長が就任し、「陶板だからこそできることなのでやってみたら」と言ってくれ、就任最初の追加作品として制作しました。失われた名画を再現することは正士館長、明彦館長両名の考えでもありましたし、特に幻の〈ヒマワリ〉は焼失してしまったので、二度と燃えない陶板で再現することが意義のあることだと思いました。20年前に兵庫県立美術館で開催された展覧会の図録に記録があり、写真があることもわかっていました。

海出：これも写真が残っていたんですか。戦時中の話ですね。

浅井：このカラー写真は原画の画集を撮影したもので、当時の作品の持ち主の山本^{こやた}顧弥太氏(武者小路実篤を支援した実業家)のご家族と、武者小路実篤記念館がお持ちでした。そこで、武者小路実篤記念館に連絡を取っ

たところ、快く写真を貸してくださいました。山本願弥太氏のご家族にも許可をいただくために神戸まで訪ねて行きました。当館にも来館されたことがあり、すぐ理解くださり、ぜひ陶板で再現してくださいとおっしゃってくださいました。

陶板にする時には、大塚オーミ陶業の職人が隅から隅まで研究し、テクスチャーや厚みもゴッホの他の写真を参考に作っています。千足伸行先生(当時、成城大学教授/絵画選定委員・近代)にも監修していただきました。

海出：本当にこうだったのかは誰もわからないということですか。

浅井：ええ、そうです。ただ、おそらく限りなく近いのではないかと思います。それがわかるのは、山本願弥太氏のご家族だけだと思います。小さい時からずっとこの絵を見て、兄妹のように過ごしていらしたそうです。再現した陶板名画について「本当にこの通りです」とおっしゃったので、いいものができたなと安心しました。

海出：私は素人ですが、他の6枚と並べてみてもまったく違和感がありません。素晴らしい出来映えだと思います。

浅井：いろんな方のご協力なしでは絶対できなかったことですね。特に、武者小路実篤記念館の方々には大変お世話になりました。

田中：まさに陶板でしかできないことですね。

+

×

+

×

当美術館独自の展示方法

海出：環境展示や系統展示という独特の展示をなさっていますが、こういった発想からですか。

田中：絵画選定委員の先生



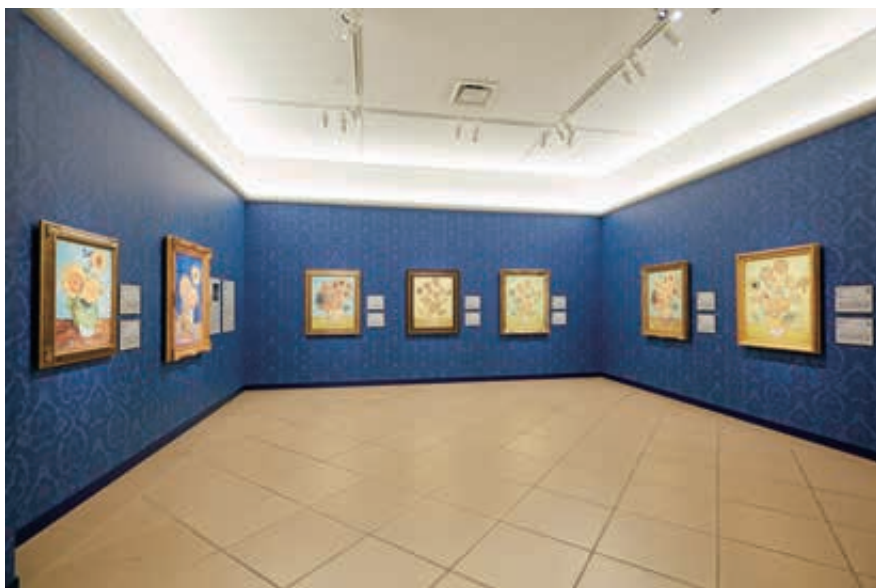
幻の「ヒマワリ」

方の選定会議の中から生まれました。

場：系統展示、環境展示、それからテーマという展示の方法も。

海出：〈システイーナ・ホール〉や〈スクロヴェーニ礼拝堂〉は非常に大きなものですから、これが展示できるような建物を作れということですね。

田中：そうです。設計の段階で決まっていたから、設計者は大変だったでしょうね。細かく部屋ごとに実際に絵を縮小して貼り付けて、模型を作っていました。設計しながら、本当にこれができるのかとおっしゃっていました。本音ですね。



7つの「ヒマワリ」

海出：〈エル・グレコの祭壇衝立復元〉も、素晴らしいアイデアですね。

田中：^{かんき}神吉敬三先生(故人/当時、上智大学教授/絵画選定委員・バロック)のこだわりですね。

海出：散逸してしまったものを一か所に集めて復元していますが、元々あのような形だったんですか。

的場：中央・下の金の部分が、最初の設計と違って一段上がっています。学術的にいろいろ検証して最終的にあの形になりました。

海出：額縁もすばらしいですね。

的場：ルーヴル美術館で監修してもらい、額縁の幅30cm、4つあわせると1t以上あります。

海出：どうやって運びこんだんですか。

田中：建物建設中に天井からです。

的場：4本を別々に天井からウインチで上げて入れて、作品の前で組み立てています。

海出：額縁といえば〈皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠〉のような幅10mもある巨大なものがありますが、あれは本当に大変だったのでは。

的場：各部屋の入口が大きいので、入口より大きい額縁はすべて先に入れていきます。飛行機で送れる大きさまでは一体で作って、それを建築の状況に応じて先に入れていきます。〈エル・グレコの祭壇衝立〉だけは飛行機に載せられなかったので船で運びました。

〈エル・グレコの祭壇衝立〉の額縁は、日本、イタリア、スペイン、アルゼンチンで見積もりを取りましたが、日本とアルゼンチンは制作できない、スペインは月桂樹の木を探すのに1年かかると。月桂樹の木は虫が食わないんです。それでイタリアに決まりました。

+

×

+

×



エル・グレコの祭壇衝立復元

お気に入りの作品

海出：ここで皆さんの個人的なお気に入りの作品をおしえてください。

田中：クリムトやモンドリアンの作品が好きですね。

的場：私は〈スクロヴェーニ礼拝堂〉ですね。本当は現地にある祭壇も再現したかったです。

浅井：〈最後の晚餐〉です。ここでしかできない展示だからです。

富澤：その時々でいろいろ変わりますが、〈モネの大睡蓮〉でしょうか。夏場は睡蓮と一緒に



皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠



大塚国際美術館 学芸部部长 浅井智誉子さん



大塚国際美術館 学芸部 富澤京子さん



楽しんでいただけて、屋外という点でもここならではの展示です。

海出：屋外は〈モネの大睡蓮〉だけですか。

富澤：古代のもので〈鳥占い師の墓〉もありますが、青空の下は〈モネの大睡蓮〉だけですね。

田中：画家でなく作品で選ぶとトルコ、カッパドキアの〈聖テオドル聖堂〉もいいですね。

的場：〈聖テオドル聖堂〉は入った時に砂の匂いがするんです。現地とまったく同じです。

田中：まさに現地に行ったような気持ちになりますね。



美術専門家から高い評価

海出：大塚国際美術館は、美術館の世界の中ではどういう位置づけで見られているのでしょうか。

田中：当初はレプリカ美術館という言い方もされていましたが、今はそういう見方をする方は

少ないですね。日本国内だけでなく、地中海学会、全国美術館会議などの世界的な学会も誘致していますが、皆さんほかの美術館と同じように見ておられます。納得されているようですね。批判的な意見はまずないです。

海出：近々地中海学会がおりになるとか。

田中：2022年の6月にあります。2回目です。

海出：誘致するのも大変なんでしょうね。

田中：そうですが、われわれにとってもありがたいですし、専門家の先生方に知っていただくことが大きな味方になりますから。

海出：陶板美術館ならではの素晴らしさを皆さんが理解してくれていると。

田中：われわれの役割をわかってくれているように思います。環境展示などは教育的にも役立ちますし。

海出：海外では当美術館の知名度というのはどうなのでしょう。

田中：海外から来館された方の評価は高いんです。アメリカのゲッティ財団は大きな美術館を持っていて、学芸員や修復師も含めて40名ほどが来られました。大変驚いて、「うちの作品はいつでも許可を出しますから使ってください」と。残念ながら今は展示スペースがいっぱいです(笑)。

海出：作品の入れ替えはできないんですか。

田中：当館は常設展示であり、陶板は壁にボルトで固定してありますから。その他にも海外の学者が来られますが、評価は高いです。

海出：そういう話を聞くとうれしいですね。



米津玄師さんのこと

海出：2018年末のNHK紅白歌合戦に、徳島県出身の歌手米津玄師さんが〈システィーナ・ホール〉から生中継で出演されましたね。私もテレビで見ましたが、素晴らしい演出に感動しました。準備が大変だったと思いますが、今だから話せる裏話がありましたら。

田中：何ととっても周囲に秘密にするのが大変



システイーナ・ホール

でしたね。黙っていたので直前まで誰も知らないのですが、NHKは早くから準備に来るわけですよ。「NHK」と書いてある機材を出来るだけ見えないようにしてはありますが、隠しきれなくて少し見えているんです。ところがお客様は気づかない。毎年システイーナ歌舞伎の公演を開催しているので、そのような感じかなと思ったんでしょうね。

海出：勝手に思ってくれたんですね。その間〈システイーナ・ホール〉は使ってなかったんですか。

田中：いえ、機材を置いたまま舞台を覆った状態で、お客様にご覧いただいていた。

海出：あの演出に使ったろうそくの数はずごかったですね。当日にセティングしたんですか。

田中：舞台周りのセティングは前日からでした。エスカレーター上でのろうそくの演出は当日で、NHKの振付指導のもと、われわれ美術館関係者がエキストラを努めました。「Lemon」の曲になかなか合わせられず、何度も練習ですよ。その甲斐あって、本番は全員揃った動きができました。

海出：とても上手にできていましたよ。

田中：できるだけ外に情報が出ないように注意

していましたが、始まったらいつの間にか出待ちのファンが集まってきました。そういうことも想定して地元の警察には先に相談していたんです。事故でも起きたら大変ですから。ずいぶんな人数になっていましたから、すぐ警察に来ていただきました。

海出：そうでしたか。米津さんはどんな方でしたか。

な方でしたか。

田中：背が高く、物静かな方でしたね。始まる前にはスタッフやわれわれ全員に礼をされて、終わってからも皆さんに挨拶をされていました。非常に真面目な方のようにお見受けしました。

「Lemon」のCDのジャケットは米津さんがご自身で描かれたイラストですが、陶板作品にして〈システイーナ・ホール〉の入口に飾っています。

海出：放送後の反響はいかがでしたか。

田中：翌日から、入館者がどっと増えましたね。

海出：元旦からですか。

田中：ええ。ファンにとっては聖地になったんでしょうね。

海出：米津さんが好きで来たお客様というのはわかりますか。

富澤：すぐわかりましたね。グッズをたくさん身に付けていらっしゃるの。「ここがステージだったんですか」とお声がけいただくこともあります。

田中：この大塚国際美術館という名前が、全国に一気に広まりました。

海出：あの時はずいぶんメディアに名前が出ま

したね。

田中：鳴門というこの地名も知っていただいて、相当な効果ですよ。

海出：ものすごい効果です。ああいう素晴らしい企画が、時々あればいいですね。

田中：そうなんですよ。

+

×

+

×

何度来ても楽しめる美術館

海出：美術館の楽しみ方やおすすめの鑑賞方法をおしえてください。

富澤：館内にご用意している「マップ&ガイド」には、主要な作品をめぐっていただけるモデルコースを掲載しています。また、展示作品千余点のうち100点については、音声ガイド(1台500円)で聴いていただけます。

季節ごとに展示が変わる美術館ではないので、様々なイベントを企画発信しています。たとえば、今は入口にフェルメールの作品と、よく似ているけれど異なる絵を大きくディスプレイした「脳活パネル」を設置しています。違いを探すのが割りと難しいんですが、後で作品を細かく鑑賞していただくきっかけになると思います。

それから、この時期はクリスマスにご紹介したい作品5点をスタッフが解説している約15分の動画を館内で放映しています。通常なら40分～1時間のガイドがありますが、現在は一緒に巡ることができないので、動画を見てご自身で巡っていただけるように工夫をしています。

田中：今は海外に行けないので、海外旅行気分を味わっていただけるような動画も作ったりしています。

富澤：世界遺産エリアの作品も多いので、世界遺産にテーマを絞った動画もあります。

海出：熱心なリピーターの方たちはどういう楽しみ方をしているんでしょうか。

田中：1週間毎日来ていた学生さん多い

ました。どこを見ているのか、逆に気になることがあります。

富澤：現地では近づくことができない作品も多いので、間近で細部を確認したり、ゴッホ作品などは立体的な筆遣いの再現を楽しんでいただければと思います。

田中：見たいと思っても現地で展示していない場合もありますし。

富澤：そうですね。逆に作品が日本に来ていることや、現地では鑑賞制限があって入れない部屋もあります。

的場：シニアの方は海外旅行ができないと、ノスタルジアというか、前に見た時はこうだったと。当美術館で写真を撮っている方は多いですね。

富澤：本格的なカメラを持った方も多いです。

的場：小学生高学年から中学生、高校生の頃の記憶力ってすごいんですよ。私も、美術書でダビデ像の小さい白黒の写真をずっと見ていて、現地で見るとすごく大きくて驚いたことがあります。当美術館は何ととっても原寸大ですから、それを見てもらって、また現地へ行ってもraitたいですね。

海出：1、2時間ではとても回り切れませんね。

富澤：朝入って夕方までいらっしゃるという方も多いと思います。

海出：1日あっても心ゆくまでとはいかないでしょうから、何度かに分けて来られるんでしょ



聖テオドル聖堂

うね。

田中：そういう方もいらっしゃいます。

海出：皆さんそれぞれに楽しみ方を見つけて、何度でも来てくださーいということですね。

富澤：何度来ていただいても楽しめるよう工夫しています。

海出：絵画はもちろん素晴らしいんですが、設備の面はどうなんでしょうか。

的場：照明が全館LEDになりましたね。LEDは熱を持たないので、最近美術館では多くなっています。

田中：素晴らしいですよ。特に日亜化学工業さんのオプティソリスは太陽光に近いものになっていますから。今は、米津さんの「Lemon」のジャケット作品と、〈モナ・リザ〉、〈白貂を抱く貴婦人〉の3か所で使っています。

＋ × ＋ ×



「テルマエ・ロマエツアー」の様子



「白貂を抱く貴婦人」(左)、「モナ・リザ」(右)

情報発信の重要性

海出：今後の集客を増やしていくための情報発信や企画、あるいはさまざまなメディアや観光関係とのタイアップなどはどうですか。

田中：非常に大切なことだと思っています。当初10年間は美術館を運営していきただけで精一杯だったので、年間の入館者は15万人くらいで推移していました。しかし、2006年に映画「ダ・ヴィンチ・コード」にちなんだ館内ツアーを企画したところ、大ヒットで一気に5万人くらい増えました。それで、企画や広報もどんどんやっていこうということになり、2012年は人気漫画の映画化にあわせて新ギャラリートーク「テルマエ・ロマエツアー」(ガイドが古代ローマ人の正装トガを着て、絵画を巡りながら古代ローマ時代の暮らしや文化を紹介する)や、2017年からは体験型イベント「#アートコスプレ・フェス」(古代から現代の名画に登場する衣装を着て名画の登場人物になりきることができる)など、記念撮影ができるSNS向けの企画もしています。それで今は若いお客様がとて多いんです。特にこのコロナ禍では圧倒的に若い方が多いです。SNS効果でしょうね。

海出：映えるんですね。

田中：映えるんです(笑)。常に発信しています。掲示しているポスター類も多くは職員が手掛けています。

海出：県外での営業活動や広報活動はされているんですか。

田中：もちろんやっています。担当を決めて、東京、大阪、四国などを回りました。

海出：具体的にどういうところですか。

田中：旅行会社が中心ですが、企業などもパンフレットを持って回りました。

『「ダ・ヴィンチ・コード」ツアー』の頃からメディアとの人脈作りも始めました。それが功を奏して、2014年に幻の「ヒマワリ」をNHKで全国放映してもらうことになりました。それから一気に



モネ「日傘の女」のアートコスプレ

知名度が上がっていききました。

海出：メディアの側にしても、公にとっての広い利益であるという認識だったんでしょうね。

田中：それだけの魅力を感じていただけたんだと思います。今はブランドができ上がりつつあるので、すいぶん楽にはなってきました。当初は、「こんなレプリカ美術館」と言われました。

+

×

+

×

大塚国際美術館の今後について

海出：2023年の25周年記念には何かお考えですか。

田中：何か作品の追加展示をしたいと思っていましたが、このコロナ禍では海外に交渉にも行けないでしょう。今の段階では何をやらたいのか思い浮かばないですね。ですから、25周年については特別な企画は見送ることになりそうです。

海出：お客様の側もコロナ禍で外国に行けないので、外国へ行ったつもりでここへ見に来てくださーいということですね。

田中：そうです。そういう企画はいろいろやっ

ています。

海出：新しい何かを作るのはまた次の機会ということですね。

今後、目指していく方向は。

田中：初代館長・大塚正士氏の考えである、「集客」ということを念頭に置いてどうしていくかということですが、やはり何かトピックス的なことがないと人は寄ってきてくれないんですね。あっと驚くような新規の作品も追加していきたいとは考えています。

それから、ウィキペディアの「入館者数の多い美術館の一覧」に名前を連ねたいと思っています。世界の集客数の100位までが記載されていますが、トップはルーヴル美術館です。日本では国立新美術館、東京国立博物館、国立西洋美術館の国立3館だけです。今、第100位の年間訪問者数が75万人ですが、何年か経つと当然人数も上がるので、80万人を目指そうと。当館は、2019年が最高の65万人ですから、頑張りたいですね。

海出：目指せ80万人ですね。コロナ禍がおさまってくれば、いろいろと打つ手が出てくるでしょうし。

田中：そうすると徳島県にも多くの人が訪れるので、地域貢献でもだいぶ違ってくるだろうと。将来的な夢として、面白いことを色々考えていますが、たとえばフェルメールの作品を30数点全作品並べるとかです。「また大きいことを」と言われますが、可能性はあると思っています。

海出：それは面白いですね。東京の美術館などでフェルメール展をしても実際の展示は数点ですから。

田中：当美術館には今8点ありますから、将来的な希望としてできるだけ多く展示をしたいと思っています。

富澤：地元貢献の話が出ましたが、初代大塚正士館長の地元貢献の思いを引き継いだ2代目館長明彦氏の発案で、2007年から鳴門市の小学校4年生全員を毎年ご招待させていただいてい

ます。鳴門市内13の小学校の4年生全員です。2020年だけはコロナ禍の影響で中止になりましたが、時期をずらして必ず皆さんに来ていただけるよう計画しています。

海出：喜ぶでしょうね。

富澤：とても喜ばれて、また家族で来たいと。先生もとてもよかったと言ってくださいます。

田中：地元貢献はこの美術館の大きな目的の一つでもあるわけですから、これからもずっと続けていくつもりです。

海出：初めて耳にしたお話もたくさんあり、こ



鳴門市の小学4年生を招待しています

れから大塚国際美術館に来るのがもっと楽しくなりそうです。本日は長時間にわたってありがとうございました。

(2021年12月15日 大塚国際美術館で対談)

(対談編集 元木恵子)

